

めざす子ども像

生活力のある児童



表現する

- ・自分で判断して行動する。
- ・環境の変化を感じとり行動する。
- ・物や事象に命を感じて接する。
- ・学校であった出来事を再現する。
- ・友だちの喜怒哀楽を同じように表現する。
- ・劇遊びの中でイメージをもって表現する。
- ・植物を観察してイメージをもって表現する。
- ・イメージしたことを絵で表現する。



感じる

- ・環境の変化を感じとる。
- ・興味を感じたことに関わろうとする。
- ・音楽に合わせて体を動かす。
- ・同じことに何度も感動する。
- ・同じ劇に何度でも取り組み楽しむ。
- ・友だちの欠席を気にする。



気づく

- ・一瞬立ち止まって見る。
- ・過去の経験を思い出しつつぶやく、表情にだす。

支援の手だて

- ・子どもの表現を受けとめ、方向づける。
- ・子どもが自ら考える場をつくる。
- ・子どものイメージを広げる言葉かけをしたり、資料の提示をする。
- ・一人一人に応じた表現方法で接する。
(ことば、表情、身ぶり、具体物)
- ・子どもが今していることを言葉にする。
- ・子どもの表情や行動を受けとめ、適切に返す。その子が受けとめられる表現方法で表現する。

- ・子どもの行動や表現に気づき、共感する。
- ・子どもの気持ちをくみ取り、言葉かけをする。

10 障害児教育

伊藤 福男 木村 敦子 関 和典
藤村 佳令 植田 順子

1 研究テーマのとらえ方

(1) 養護学級の教育目標

本学級では、「生活力のある児童」を目指している。「生活力のある児童」の姿として次の3つの力を描いている。

- ・ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する力
- ・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする力
- ・いろいろな場面で、判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この3つの力を総合すると、「児童がその子なりの考えを持ち、よりよい方向を目指して進んで考え、判断し、表現する（行動する）力」であり、この力を持つ児童が「生活力のある児童」と考えている。

(2) 「感性」について

感性とは、「価値あるものに気づく感覚」「物や事象に何を感じ表現するかという」ことであり、さらに問題を追求すると定義されている。(片岡徳雄) この「感じ」「気づくこと」「表現すること」「追求すること」は、決して受動的な活動ではなく能動的な活動である。

本学級の目指す「生活力のある児童」の3つの力は、児童自身が受動的なものではなく、能動的に追求活動を行う姿を描いていると言えよう。

「気づく」「感じる」「表現する」の「豊かな感性」を育成することに合い通じるものとする。

児童ひとり一人の「気づく」「感じる」「表現する」授業を創造していくためには、教師自身も児童の「気づく」「感じる」「表現する」に「気づき」「感じる」「表現する」感性を持ち支援していくことが大切である。

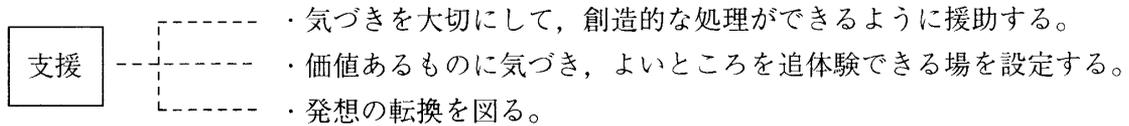
2 感性を育む支援のあり方

(1) 児童の感性をどのようにとらえていくか

児童の感性は、その児童のとりまく人との関係、対象となる物、場の設定によって変わるものであり、固定的なものではないとした上で、児童の感性に関する様子を次のようにとらえていく。

気	1	対象に気づいていない。
づ	2	一瞬対象に気づいている。
く	3	対象に気づいているが、受け入れず、取り組まないようにみられる。
感	4	対象を感じ、受け入れる。迷いながらも対象のほうへ行く。
じ	5	単発的に対象に働きかける。
る	6	感じたことを、自分が好きなような方法で対象にはたらきかける。
表	7	イメージして対象にはたらきかける。
現	8	友だちや教師の模倣をして表現する。
す	9	自分なりの表現を工夫する。
る	10	相互関係の中で、はたらきかけあいながら表現する。

(2) 教師の支援の方法



教師の支援のあり方については、教師自身が扱う素材・題材に感じている教師自身が多様な表現方法を身につけている、といったことを前提として次のように考えられる。

↓ ← ← ↑	↑	1 児童の姿に気づく。
気づく	↑	
↓	↑	2 児童の実態に気づく。
-----	↑	3 児童の姿を意味づける。
感じる	↑	
↓	↑	4 児童の姿に共感したことを表現する。
表現する	↑	
↓ → → ↑	↑	5 児童のイメージを広げることばかけ、資料の提示をする。

3 本年度の研究の進め方

昨年度は、児童の感性と教師の支援について日常の生活から考察して図式化し、それを元に授業計画をたてて実践して、教師の支援のあり方を探っていった。

本年度は、各教科・領域の指導内容によって児童の感性の様子と教師の支援の方法（例）を検討し、さらに実際の授業の中での一人ひとりの児童への支援を具体化して明示し（支援の具体例は、各実践例に掲載する）授業を進めることにした。このことにより、感性を育むための支援とは、授業の中では実際にどんな支援の方法が考えられるかを明らかにするよう取り組むことにした。

例 国語科「物語文の学習」に関する児童の感性の様子と指導者の支援の方法

	児童の様子	支援の方法
気づく	話す方に関心がないように思われる。	児童に好きな物が入った物語を選択する。 効果音や効果音楽を取り入れる。
	物語を話す人に注意をする。	
	特定の場面で表情が変わる。	
感じる	特定の場面の繰り返しのことばを言ったり、身体を動かすことがみられる。	繰り返しの動作やことばのある物語を選択する 劇あそびの場を設定する。 ペープサートや絵カードを提示する。 登場人物をシールで構成できる絵本づくりを設定する。
	特定の登場人物を言ったり示したりする。	
	特定の登場人物の特徴のあることばを話したり書いたりする。	
表現する	大まかなあらすじをとらえ、つぎにどんな展開になるか話したり書いたりする。	場面の変化、まわりの様子がわかる紙芝居を製作し、提示する。 劇あそびの場を設定し、配役を固定化しないようにする。 紙芝居と同じ絵を使って絵本づくりをする。 絵をもとに登場人物の会話や動作、まわりの情景を引き出すようなことばかけをする。 劇化の学習をする。 友だちと絵本を発表しあう。
	物語の内容をつかみ、登場人物の会話やまわりの様子を書いたり話したりする。	
	登場人物の気持ちやまわりの情景を想像して話す。	
	友だちの話を聞いて、登場人物の気持ちやまわりの情景を想像力を深めて話したり書いたりする。	